（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　西岡　敏

かつて琉球国の王府の言語であった沖縄語首里方言は，本土方言と異なる独自の敬語体系を発達させている。首里方言における敬語は，それなしには会話がまったく成立しないほど重要であるにもかかわらず，これまでの研究は部分的なものにとどまっていた。そして，今や70代でも流暢な話し手を探すのが困難なほど，首里方言は消滅の危機を迎えている。このような状況下において，西岡敏氏の博士学位請求論文『沖縄語首里方言の敬語体系』は，「方言ニュース」のキャスターを務めていておそらく流暢に話す最後の話者と見られる一人の女性を対象に，その敬語体系を徹底して記述したものである。

論文の構成は，まず，首里方言の現状と敬語研究の必要性を説き，動詞形態論の再考を行なったあと，敬語体系を「丁寧語」「尊敬語」「謙譲語」「名詞の敬語」「卑罵語・尊大語・親愛語」「人名詞の連体修飾と親疎関係」に分けて論じ，最後に「方言ニュース」においても敬語が使われるその実態を例示している。

本論文の中心は，第５章の尊敬語と第６章の謙譲語にある。これらに該当する形式を多数取り上げ，その活用を記した後，各々について，話者から聞き出した文例を中心に，沖縄の文献資料からの文例も加えながら，その意味・用法を詳しく分析している。

形の上では，規則的に作られる「一般形」，独自形をもつ「特定形」，両形の組合せからなる「準特定形」に三分する。尊敬語の一般形は/-miseeN/(お～になる)を，特定形は/'usagayuN/(召し上がる)など10種を，準特定形は/'waaci-miseeN/(お歩きになる)など２種をあげる。謙譲語では，一般形は/'u～wugamjuN/(お～する)など３種，特定形は/'uNnukiyuN/(申し上げる)など８種，準特定形は/'wiicee suN/(お会いする)など３種を扱う。方言の敬語形式をこれほど網羅的に取り上げた研究は，これまでなかった。

内容面では，首里方言の尊敬語は「話し手が主語を高める表現」(これは標準語と同じ)で，主語が父母などでも適用される「身内敬語」であると規定する。他にも，首里方言の話し手が首里以外の目上に用いる尊敬語形があること，通時的に敬意の補強が見られること，通常の過去形と経験過去形の意味の違い，等々の新しい知見が見られる。

首里方言の謙譲語については，「話し手が補語を高め，主語を低める」という「補語への敬語」だけをもち，標準語にあるもう一つの「聞き手への敬語」はないこと，および，語彙化した特定形は使われるが一般形の使用頻度は低いこと，等々を明らかにした。

解釈をさらに深めてほしい箇所があり，また分析の枠組み自体が標準語のそれに依存し過ぎているのではという指摘もあったが，方言の敬語の分析をここまで進めた功績は大きく，本審査委員会は，本論文を博士(文学)にふさわしいものと判断する。